

はじめに 前夜祭「2020年から来た怪獣」ケムール人がウルトラマンに

2019年12月——。

スポーツ紙の芸能欄に載っていた1枚の写真。思わず目が奪われる。

ウルトラマンが立っていた——。でも、なにかが違う。なんだ、この違和感は！

あ、そうか、そういうことか。そのウルトラマンにはカラータイマーがなかったのだ。

写真は公開調整中の、庵野秀明あんのが企画を務める映画『シン・ウルトラマン』の宣材らし

く、成田亨とむる氏の目指した本来の姿を志向した結果のデザインコンセプトのようだ。その

他、今現在判明しているのは、主演の斎藤工たくみほか豪華キャストそらが揃い踏みしていることくらい。

ただ、すでにネットを中心に期待は膨らみまくっている。なにせ企画・脚本が『エヴァ



胸にカラータイマーがないだけで世間がザワついた

©2021「シン・ウルトラマン」製作委員会 ©円谷プロ

ンゲリオン』を生み出した庵野秀明だ。彼が総監督を務めた、あの『シン・ゴジラ』の完成度の高さを見れば、まったく新しい観点からのウルトラマンが作り上げられるのは間違いない。

これまでのウルトラマン・ワールドの固定観念をぶち破る。その覚悟のひとつがカラータイマーなきウルトラマンになる……のか？ それにしてもだ。カラータイマーがない。それだけで、どの世代もなにかしらの反応を見せる。放送開始から半世紀以上が経つてもなお、ウルトラマンをキーワードに各世代が思い出に耽り、新しい感慨を抱く。

まさにウルトラマンは、語り継がれる永遠

の正義の味方」と評してもよいだろう。

今やその人気と影響力は国内にとどまらず、アメリカ、アジア各国で頻繁に出演者たちのサイン会を中心としたイベントが催されているほど。ではなぜ、これほどまでにボクたち……地球人の心の奥底にウルトラマンはどっしりと根を張り続けているのか。なぜ、50代、60代の日本人、いや地球人は今でもウルトラマンを目にすると胸が躍り、ときに涙してしまうのか。なぜ、若いネット世代は半世紀前の作品ひとつひとつに新しい見解を探し出し、積極的に語り合おうとするのか。

そこで――。

ウルトラマンに関する、多くの「なぜ」を解き明かすべく、ウルトラマンになった男、ウルトラマンの中に入りスーツアクターとして戦った古谷敏と、ウルトラマン・リアル視聴世代の代表として漫画家やくみつる、そしてプロレスにやけに詳しい物書きの佐々木徹が徹底的に語り尽くす『ウルトラマン不滅の10大決戦』を開催。それもウルトラマンと怪獣、宇宙人との戦いにフォーカスした語り合いだ。

なぜウルトラマンの戦いをテーマに語り合うのか。それは、ウルトラマンの戦いが単な

る勸善懲悪ではなかったがゆえに、そこからなにかが見えてきそうな予感がするからだ。  
ウルトラマンはなんのために戦ったのか、なにを守ろうとしたのか、それこそ戦うこと  
が正義だったのか。

さあ、今一度、半世紀前に。アーリー・ウルトラマンの世界へ。

1966年7月17日午後7時の茶の間に戻ろう――。

佐々木徹



西暦2020年夏、私はウルトラマンに会った。ウルトラマンのスーツこそ着ておられなかったが、私の眼前に現れたその人は、ウルトラマンそのものであった。

とてもスリムで高身長（40mこそないもの）。が、圧倒的にカッコいいシェイプより、まず私の目に飛び込んだのは、そのシュッとした鼻筋であった。瞬間、私は思った。こんなに鼻が高くて、マスクをかぶる際に邪魔にならなかつたのだろうか。

人間、強く緊張を強いられるときほど、こんな余計なことを考えるものなのか。その高い鼻の主は、もちろんウルトラマンⅡ古谷敏さんである。古谷さんは、一瞬にして小学2

年生に戻ってしまっていた私を、ことのほか優しく招じ入れてくれた（不遜にも私のほうが入室があとだったのだ）。

今、私はあのときのウルトラマンと正対している。もちろんこれからたくさんお話をうかがわなければならぬのだけれど、私の心のカラータイマーはとうに赤に変わり、このまま昇天しかねないほど打ち鳴らされている。

それもそのはず。『ウルトラマン』初回放送時の昭和41年夏、私は東京都世田谷区立深沢小学校の2年生。前作『ウルトラQ』とともに、ド真ん中の「Q・マン世代」なのだ。級友の多くがそうだったように、まあ、ハマりにハマった。当時、私の家には脚付きの旧式の白黒テレビしかなかったが、その丸っこい小さな画面をそれこそ食いつくように観<sup>み</sup>ていた覚えがある。家庭用ビデオなど考えもしなかった時代、初見で怪獣の絵を描けるようにしておきたい。その一心であった。もちろん少年漫画誌などではしばしばグラフィ記事の題材にもなっていたし、それらを参考にもできたはずだが、まだ貧しかった時代、少年誌は床屋の待ち時間に読むのがせいぜいで、必然的に、放映一発勝負での怪獣観察であった。そのおかげで、今でも大概の「Q・マン」の怪獣はソラで描くことができる。

そんな下真ん中世代にとって、ウルトラマン本人に会ってお話をうかがえる。まさに光の国からの贈り物。コロナ禍でろくに外へも出られず、鬱々と巣籠もりを強いられるはずだった2020年夏に、突如舞い込んだ重大任務。それは私のまったくの独断で選んだ「不滅の10大決戦」をもとに、ウルトラマンⅡ古谷敏さんに死闘を述懐していただくというものであった。当時のマスクの下の荒々しい息遣いが、ソーシャルディスタンスを置いた数m先から聞こえてくるような、生々しい証言の数々。当時をリアルで体験した同輩諸氏はもちろん、後年ウルトラマンに魅了されていた、若い世代の方々にもぜひお楽しみいただきたい。

## 追記

冒頭、大仰に書きだした「2020年」は、古谷敏さんをウルトラマン起用へと導いたケムール人がタイムスリップの起点とした「未来」でもある。時は流れ、その「未来」が「現実」となったその年に、ケムール人本体とも出逢<sup>であ</sup>えた奇跡も、実はウルトラマンと対面したのと同様に、感極まる一大事なのだった。

やくみつる

佐々木 全国3000万人（推計）のウルトラマン、特撮ファンのみなさま、こんばんは（日テレアナウンサー時代における徳光和夫のプロレス実況中継風に）。今宵こよいからお届けするのはウルトラマンVS.怪獣の壮絶な格闘シーンにスポットライトを当て、10位から栄光の1位までのランク付けにトライした『ウルトラマン不滅の10大決戦』でございます。

この歴史に残る、画期的な試みに参戦していただくのは「Q・マン世代」の代表として、今回のベスト10を選定した漫画家のやくみつるさん。そしてもう御一方は「ウルトラマンになった男」、そうです、ウルトラマンのスーツの中に入り、全39話、地球の平和のために戦い続けた不屈の男、古谷敏さんです！

古谷 そんな大袈裟おおげさな（笑）。

佐々木 そして司会進行は、初めて目にした再放送の第33話「禁じられた言葉」で、メフィラス星人になら地球をあげちゃってもいいや、と罰当たりなことを真剣に考えていた、物書きの佐々木徹が務めさせていただきます。

やく プロレスに造詣が深いんでしょう？

佐々木 一応、取材を通し、生前のジャイアント馬場さんからプロレスのイロハの『イ』



を教えてくださいまして。というわけで、以上、この3名で『ウルトラマン不滅の10大決戦』をお届けしてまいります。なにより、やくさん——。

やく はい。

佐々木 ウルトラマンと怪獣の格闘シーンだけに特化した解説はこれまでに——。

やく なかったように思います。私の知る限り、書籍などでもなかったはず。

佐々木 ですよ。ウルトラマン誕生秘話などを追った解説本やウルトラマンの世界観を

描いた書籍、怪獣・宇宙人のカタログ雑誌などは目にしますけど、ウルトラマンがなぜ、

あの怪獣に対して相撲技を出さねばならなかったのかを解説した本はありません。

やく このたび、古谷さんと対談させていただくにあたり、『ウルトラマン』全39話を今

一度つぶさに拝見しました。とりわけ、この書籍のメインテーマである格闘部分に

関しては、所要時間の計測にはじまり、繰り出した技の分類、決まり手の確認などを行な

いました。必殺技のスペシウム光線が最多の決まり手となっていることは論を俟ちませ

が、その他にも多種多様な技をウルトラマンは毎回繰り出している。今回改めて気づいた

ことなのですが、スペシウム光線の効きをよくするためか、対戦相手の怪獣の体力を殺ぐ

段階では、相撲や柔道、プロレスの技を多用しているんですね。ここらは必然的に演じられる古谷さんの「地」の部分かいまみが垣間見えるところなのではないかなど。

佐々木　というわけで、この対談では、そういう戦い方、技の出し方、決戦中の心理状態にまで迫って考察していきたいと思っています。というのも、実はウルトラマンの戦い方が、のちの各分野、映画とかアニメとか、いろいろなところに刺激と新たな創作を与えていることが判明しているからなのです。その詳しい話はおいおい順位の発表とともに明らかにしていきたいと思いますが、まずは本題に入る前に、やくさん、今年2020年といえば……。

やく　ケムール人です。1966年5月8日に放送された『ウルトラQ』第19話「2020年の挑戦」に登場。

古谷　それがきっかけで、僕はウルトラマンに入ることになるわけですから、思い出深い作品ですよ。

佐々木　そのケムール人のボディラインの美しさに魅了された『ウルトラマン』の美術総監督・成田亨さんが「コイツしかいない、ウルトラマンは古谷敏しかできない」と制作側

にゴリ押ししたのは有名な話でして。

古谷 別にゴリ押ししなくてもよかったですよ、本当に（笑）。僕は顔を出した俳優としてがんばっていた時期でしたから。映画で主役を演じたい、恋愛映画の主人公役を演じたいという夢もありましたし。なのに、成田さんに呼び出されて彼の工房に行くと、いきなり有無を言わずマスクの型を取られて。以来、ウルトラマンのスーツの中にピッター

入れるのは、僕しかいなくなった

（笑）。

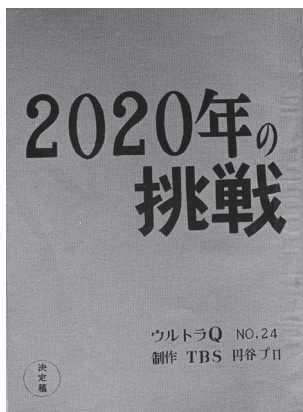
佐々木 それが運命というものです。

古谷 やくさんは「2020年の挑戦」をリアルタイムでご覧になった？

やく もちろんです。小学校2年生のときに。



このプロポーションが成田氏の目に留まり、古谷ウルトラマンが誕生した



ケムール人が登場する回「2020年の挑戦」の台本

古谷 じゃあ、怖かったですよね？ 『ウルトラQ』は。あのモノクロの映像がね。

やく 独特なイメージがありましたから。

古谷 後年、カラー化されたけど、迫りくる怖さという面ではモノクロのほうが説得力もあつたし。

佐々木 ええっと、なかなか本題に入れないのですが、そろそろ第10位の発表を。

古谷 いいじゃないですか、今回は前夜祭にしましょう（笑）。本編でも前夜祭が放送されていきますしね。

佐々木 1966年7月17日に放送された記念すべき第1話「ウルトラ作戦第一号」の前週に「ウルトラマン前夜祭 ウルトラマン誕生」が茶の間に届けられています。

古谷 それもね、苦し紛れだったというか（笑）。制作が間に合わなくて。なぜ、制作が間に合わなかったのかは、おいおい語っていきます。